

HART Newsletter

Vol.14 2004.11

〒730-0051 広島市中区大手町5丁目7番10号
アクシーズビル3F 広島HARTクリニック
TEL 082-244-3866 FAX 082-244-3864
http://www.enjoy.ne.jp/hart/
E-mail :hart@enjoy.ne.jp

生殖医療における品質管理システム 国際シンポジウム開催

広島HARTクリニック高橋院長が セローノ・シンポジウム会長を務める

本年6月12、13日に東京ANAホテルにおいてThe Total Quality Management in IVF programと題した国際シンポジウム(セローノシンポジウム)が開催されました。わが国の生殖医療に品質管理システム(QMS)を導入する必要性を唱えて誕生したJISARTが初めて公式に開催したシンポジウムで、理事長である高橋院長が会長となり、世界中からその分野の権威である講師を一同に迎えるという過去に例を見ない規模のシンポジウムとなりました。セローノシンポジウムは30年以上の歴史を持ち、生殖医学の発展のために欧米を中心に開催され、その講師は常に各分野における世界のトップの医師や科学者が指名されてきました。今回アジアで初めての開催となり、JISARTが後援することになりました。

講演は全て英語で行われましたが、初の同時通訳付きセロ

ーノシンポジウムということもあり、東南アジアからの参加者も含め300人を超える参加者がありました。初日は午前中



シンポジウムの様子

体外受精における卵巣刺激法についてイギリス、フランスの医師より講演があり、特に新しいGnRHアンタゴニスト使用についての発表がありました。アメリカの医師は反応不良の症例の対策について講演しました。午後はQMSにおける医師、カウンセラー、患者、エンブリオロジスト、倫理委員会の役割についてドイツ、ニュージーランド、オーストラリアからそれぞれの専門家が講演しました。最後に高橋院長がJISARTの設立理由、今後の方針について講演しました。

(次ページに続く)

広島HART、ISO9001認定証届く

～東京HARTも認定監査終了～

Newsletter Vol.13でお知らせしたように、広島HARTクリニックはISO9001の認定審査に合格し、2004年6月9日付けの正式認定証がLondonに本社を持つNational Quality Assurance (NQA)社より届きました。生殖補助医療のためのISO9001の認定はわが国では初めてのことです。東京HARTクリニックも2003年12月よりISO取得準備に入り、本年9月16日に最終審査が行われ、無事合格しました。患者さんのご協力に感謝します。今後もISO維持のために努力しますが、アンケートなどによるクリニックの評価は患者さんのご協力なしにはできませんので、今後ともよろしくお願ひします。





JISARTメンバーとEdwards先生、Saunders先生

(前ページより)

2日目の午前には胚盤胞移植法がテーマで、アメリカで最も多くの症例を行っている一人のWilson先生の講演、凍結法につ

いては広島HARTクリニックの向田先生、胚盤胞培養についてアメリカのBehr先生が講演しました。胚の質というテーマでは、国立成育医療センターの斎藤英和先生、イギリスのHardy先生が講演しました。そして最後のセッションではこれからの生殖補助技術をテーマとし、韓国のCha先生、イギリスのBrison先生が新しい技術についてその可能性や将来性について講演されました。最後に体外受精の父と呼ばれるイギリスのEdwards先生が講演されシンポジウムは終了しました。

生殖医療へのQMS導入という考えは欧米でもまだ始まったばかりなので、今回のシンポジウムは海外の参加者にも好評でした。わが国でも今後QMS導入による生殖医療の質の向上を目指す施設が増えることが期待されます。なお、シンポジウムの全てが収録されたCDがセローノ社で作製され、参加できなかったART施設にも配布されて、好評を得ています。

高橋院長プレスカンファレンスでJISARTについて語る

本年6月1日、東京大手町サンケイプラザにおいて【不妊治療に新ガイドライン導入～患者が参加する治療の確立へ～】と題したJISARTのプレスカンファレンスが行われ、約50社の記者が出席しました。JISARTのHP (www.jisart.jp)にART施設のためのガイドラインを掲載し、「このガイドラインがこれからのわが国のARTの標準となるべく努力することがJISART会員の責務であり、そのために3年ごとの施設監査が必要であり、監査には患者の代表が含まれなければならない」と高橋院長

は述べました。わが国では実施されることがない医療機関の監査、さらに患者代表も参加するという新しい発想に多くの質問が記者からあり、院長の他に出席したJISART副理事長田中温セントマザー産婦人科医院長、森本義晴IVFなんばクリニック院長が応答しました。内容について翌日のNHK朝のニュースを含め全国、地方新聞で報道され、JISARTへの関心の高さが示されました。

第49回日本不妊学会、第22回日本受精着床学会報告



HARTグループからの参加者

日から4日にかけて、北海道旭川市において両学会が合同で開催され、HARTグループからは医師3名、看護師5名、エンブリオロジスト4名、カウンセラー2名、事務職員1名の総勢15名で参加しました。HARTグループは5題の口頭発表を行い、また広島の高橋先生はシンポジストとして登壇しました。この中から、広島HARTクリニックの吉岡看護師長と中田カウンセ

日本不妊学会と日本受精着床学会は、わが国の生殖医療に関する最も権威ある医学会であり、HARTグループも毎年参加、研究発表を行っています。本年9月2

セラが自分の発表について報告します (P3参照)。それ以外の発表、シンポジウムの演題については次のとおりです。

「超急速ガラス化法において拡大胚盤胞の胞胚腔を人工的に収縮させることで融解後生存率の向上を試みた臨床成績」

発表者 向田哲規 (広島HARTクリニック副院長)

「GnRHアンタゴニスト使用卵巣刺激法におけるGnRHa投与後LHサージの検討」

発表者 向田哲規 (広島HARTクリニック副院長)

「Cryoloop法で凍結保存したマウスGV期卵の体外成熟率とICSI後の発生」

発表者 中村早苗 (広島HARTクリニック検査部主任)

シンポジウム「ARTのQuality assurance：患者が参加するART施設の品質管理システム」

高橋克彦 (広島HARTクリニック院長)

生殖補助医療によって妊娠した妊婦への 看護支援のあり方

～妊娠反応陽性から胎児心拍確認まで～

広島HARTクリニック
看護師長

吉岡 千代美

今回、妊娠判定から、産科病医院へ紹介となる妊娠7週までの毎週の受診日に、その時々不安内容についてアンケート調査を行いました。全体の傾向として各週とも「流産」「出血」についての不安が高いこと、また妊娠週数別では、妊娠5週目は「日常生活の過ごし方」「食事」「仕事/家事」「子宮外妊娠」を、6週目の受診日は「超音波所見」、7週目には「食事」「日常生活の過ごし方」についての不安が特徴的でした。また、

流産既往のある人はない人に比べて流産や出血への不安を多く挙げる傾向にありました。今回の調査で、ART治療後の妊婦は妊娠判定直後から様々な不安を抱えていることが明らかとなり、それに対するサポートが必要であるということが分かりました。妊娠は「ゴール」ではなく新たなスタートです。不安を持つのは当然のことですがもっと素直に喜べるように、過度な不安を持たないように、今回の調査結果を参考にして援助させていただきたいと思っています。最後になりましたがアンケート調査にご協力くださった方々に感謝いたします。有難うございました。



不妊症患者の「こころのケア」「こころのささえ」に関する研究

広島HARTクリニック
カウンセラー

中田 史子

広島HARTクリニックの患者様のご協力をえて、治療中の「こころのケア」の在り方について発表させていただきました。調査結果から、①夫を『ささえ』としたい切実な思い、②治療経験者へのサポート期待をどう反映するか、③身近にこころの専門家からの援助が求められる／受けられる環境も重要、④医療スタッフの“ケアする能力”の質の向上とともに、患者様の“ケアを受容する能力”を高めるための心理教育的アプローチが必要であるという結論が得られました。また、調査結果は、日本心理臨床学会第23回大会においても、『不妊治療中の患者の「喪失」

に関する一研究』という演題で発表（ポスターセッション）させていただきました。ご協力ありがとうございました。今後も、定期的に調査・研究への協力

のお願いをすることがありますが、よろしく願いいたします。なお、発表の詳細は『カウンセリングルームだより』（広島HARTクリニック）でお知らせさせていただきます。



東京HARTクリニック ISO認証への取り組みを振り返って

東京HARTクリニック
ISO事務局長

志摩 圭子

ISO取得に向けての活動は、まず日常業務を文書化することから始まりました。頭を悩ませる作業を進め、ミーティングを重ねるうちに、様々な発見や疑問が生じました。それは、業務を文書化することで、全体を客観的に捉えることができ、

これまでの業務で曖昧になっていた部分が浮き彫りにされたからです。その後もミーティングを重ね、患者さんが安心して治療できる環境をつくるには、どうしたらよいかと考えていきました。この一連の活動は、スタッフ同士のコミュニケーションを深め、様々な改善ができ、大変意味のあるものとなりました。

しかし、まだまだ至らない点があり、更に向上するためには、患者さんの意見を反映することが大切です。今後ともスタッフ一同努力して参りますので、ご協力をお願い致します。

ESHREヨーロッパ生殖医学会 (inベルリン) 参加報告

東京HARTクリニック 副院長

後藤 哲也

2004年6月27日から30日まで、ドイツ・ベルリンで開かれたESHRE (ヨーロッパ生殖医学会) に参加してきました。今年の話題のひとつに、卵巣組織の凍結保存・再移植があり、韓国、アメリカ、ベルギーの研究者たちから発表がありました。患者自身の体内に再移植後、卵巣組織片から卵子を採取し、体外受精・胚移植を行うことまで可能になりましたが、残念ながら、体外受精による妊娠

例はまだありません。一方、ベルギーの1グループは、体内受精に成功したと報告しています。これは、20歳代のリンパ腫患者から片方の卵巣を摘出 (もう一方は残した) 凍結保存し、化学療法後に解凍、残された卵巣部分に移植し、自然妊娠が成立したというものです。そして報道によると、9月23日に3720gの健康な女児が誕生したとのことですが、得られた卵子が、本当に移植片由来のものかについてなど、詳細は雑誌での発表を待つ必要があります。いずれにしても、卵巣組織の凍結保存技術は進歩しており、近い将来、化学療法や放射線治療前に卵巣を採取し、凍結保存しておくことが、一般的に行われるようになるかもしれません。

オーストラリアRTAC施設監査同行記

東京HARTクリニック 副院長

後藤 哲也

2004年9月6日から9日までの4日間、オーストラリア・クイーンズランド州で行われた、生殖医療施設認定審査に同行してきました。これは、生殖技術認定委員会 (RTAC) が、3年ごとに施設を審査し、一定の水準を満たせば、新たに3年間の認定を与えるというシステムで、国からの医療費は認定施設で行われる不妊治療に対してのみ支払われます。RTACのメンバーは、医師、科学者、看護師、カウンセラー、患者代表の5名からなり、それぞれの視点から施設を審査します。各施設の設備の安全面やプライバシーの確保にはじまり、妊娠率、多胎率、OHSSなどの合併症例、カルテの記載事項、患者

用のパンフレット・同意書などについて、半日から1日かけて審査が行われます。このシステムの特筆すべき点は、患者を「消費者」と捉え、その「消費者」の声が施設の運営・改善に反映されるという点、および、それぞれの施設の規模に応じて、一定の医療水準を維持していくための施設内システムの確立を手助けする点です。つまり、医師主体の治療ではなく、患者が客観的な正しい知識を得られるよう支援し、患者が医療スタッフと共に、自分の治療について、意思決定ができるようなシステムの確立です。

日本でも、昨年、広島HARTクリニックの高橋院長を中心としてJISARTが発足し (Newsletter Vol.11参照)、2005年からオーストラリアと同様な審査システムの導入が予定されています。密室の行為と考えられがちな日本の医療が、患者の目から評価を受け、医療の質向上につながる事が期待されます。

Fertility Nurse Workshop in Assisted Reproductionに参加して

広島HARTクリニック 看護主任

出口 美寿恵

2004年8月16日～19日の4日間、イギリスのBourn Hall Clinic (BHC) で行われた研修にJISART施設の看護師10名が参加し、私は昨年に続いて2回目の参加となりました。BHCは、1978年に世界で初めて体外受精による妊娠・出産を報告した、Patrick Steptoe医師、Robert Edwards博士が開設したクリニックです。BHCはこれまでの経験を生かした独自の教育プログラムを持ち、海外を含めた多くの施設からの受講者を受け入れています。講義の内容は、両氏と一緒に働いた経験のあるスタッフから当時の経験、体外受精治療の歴史、現在に至るまでのBHCの取り組みについて聞き、医師や看護師からは治療システムや看護教育プログラムについて、着床前診断 (PGD)、男性不妊、多胎妊娠などの専門分野については、大学から講師を招いて講義を受けました。イギリスでは、看

護師が超音波診断から注射の投与量の決定、採卵時の麻酔看護師、人工授精、採卵、胚移植など行う施設もあります。この不妊看護師の役割や教育・研修などは看護師自らが求めて拡大していった経緯があります。ART治療に関し



修了書を受け取る出口看護師

ても国のガイドラインがありHFEA (受精胎児問題管轄局) によって厳しく管理がされています。ARTを取巻く環境は日本とは随分異なりますが、私たち不妊に係わっている看護師もこのような経験を生かしながら自ら研修を行い役割について考える必要があります。今年で2回目を迎えたBHC研修ですが、私にとって世界で初めて体外受精が行われたBHCで、当時の雰囲気を感じ、不妊看護師の役割について考え、BHCやJISARTの看護師と意見交換が出来たこの研修はとても貴重な経験になりました。